

# 原発 ゼロ にむかって

2013年9月30日 No.55

<http://www.tokyominiren.gr.jp/>

編集・発行／東京民医連事務局 tel：03-5978-2741 fax：03-5978-2865 mail：sien@tokyominiren.gr.jp

## 医学生による「福島フィールドワーク」立川相互病院

立川相互病院では震災以降、杏林大学の奨学生を中心に定例ミーティングでの震災・原発に関する学習や震災ボランティア参加に取り組んできました。その中で「原発被害者の方々の話を実際に聞き、体験してみたい」との学生の声に応え、8月16日～17日に杏林大学分室・福島フィールドワークを実施しました。医学生3人のほか、平林靖子 Dr、南條嘉宏 Dr も参加しました。



### <1日目> 福島第一原発20km圏内視察

三浦広志さん（福島農民連・浜通り農産物供給センター代表理事）の案内で、津波の被害状況を伺いながら原発20km地点に。現地は震災後全く手付かずの状態、田畑には雑草が生い茂り、津波で流されて陸に上がった船やガレキも放置されていました。浪江町まで進むと中心街はゴースタウンと化し、震災当日から時間が止まったようでした。

その後、農民連事務所でお話を伺いました。現在、三浦さんが住む仮設住宅には様々な地域から人が集まっているが、もと住んでいた場所によって賠償金が違うことが不仲の原因になり、コミュニティーが形成し

づらいとのこと。また「若い人は農業を再開したり違う仕事もできるが、高齢者はそれができず、何もやることがない」とも。20km圏内もだいたい線量が下がってきているが、内陸の人たちはそれをあまり知らず、線量を気にして現地を見に行こうとしないことも語られました。

### <2日目> 福島医療生協わたり病院

#### ○齋藤 紀 Dr 講演「福島原発事故と医療」

放射線の説明やチェルノブイリ事故と福島の事故との比較、福島県民の不安にどう応えていくかについてご講演いただきました。

現地住民の関心が高まっている中、しっかりと放射能汚染のリスクを学び理解することが求められていること、原発事故で対立構造を強いられ苦しい経験をしてきた福島県民が、これからは手を携えて乗り越えていかなくてはならないことなどが語られました。

#### ○根本看護師長のお話

わたり病院職員で、被災地の保育現場の手記集「忘れない！明日へ共に」筆者・大澤由記さんのエピソードを、看護師長の根本さんに紹介していただきました。『大澤さんの3人のお子さんは皆、外遊びやお花が好きな子たちだったが、震災後は外遊び・草花に触ることも許されず、多大なストレスを感じながら生活していた。「このままではずっと放射能汚染の不安を抱えなければいけない。何かアクションを起こさなければ」と思い、“なくせ原発集会”に参加、子どもたちも「おれたちはもう外で遊びたいんだー！」と叫び、一緒にデモ行進した。現在も福島で生活をしているが、自分たちのためにどう行動・生活していくかを考えていかなければならない』とお話でした。

その後、わたり病院の新病棟開設レセプションで使用した動画を視聴。震災後から現在までの出来事や、支援に來られた様々な職種の民医連職員が紹介され、わたり病院の大変な状況や民医連内のつながりの強さがよく分かる内容でした。



### 参加者の感想（抜粋）

- ◆福島の人々は地震・津波・原発事故という三重苦の中で、今後の見通しも立たないまま生活を強いられている現状が今も続いている、と改めて認識し考えることができた。子どもたちの『外で遊びたいんだー！』という訴えの意味を国はもっと真剣に考えるべきだし、私もこの声に真摯に向き合っていかなければと強く思った。（平林医師）
- ◆今回、原発の被害によって人々の生活がどうなるのか、また風評被害や農家の苦悩、見えない放射線への恐怖など多くの苦悩が、未だ褪せることなく明確に存在するのを知りました。医師として原発事故や復興に対して何ができるのか、今から考えていこうと思いました。（学生）
- ◆東京では原発関連の報道は少なくなり、情報を得るのは難しくなっている。今回見てきたことや聞いたことを、現状を知らない人に伝えられたらと思う。そして、原発再稼働の方向へと進んでいる現在、そもそも問題の根本は何かという事を考えるきっかけにもなった。これからも関心を持ち続けていきたい。（学生）

今回参加した学生たちは、自らの体験を東京民医連奨学生ミーティングでも報告してくれました。立川相互病院では今後も学生向け発表の場を作るなどして、原発問題について考え取り組む活動の援助を行っていききたいとのこと。